

「秘密の開示」

(抄訳)

ホメイニー

第一章 タウヒード

〔設問〕 預言者とイマームに対し祈ること、聖なる土に病気の治癒を祈願すること、聖なる土の上で礼拝すること、堂宇や講堂を建立することは、シルク（多神崇拜）であるのか、それともそうではないのか。もしも、シルクであるならば、その理由を説明せよ。もしも、シルクでないならば、シルクの基本的意味を説明し、あれほどまで、イスラームとコーランが戦っているシルクと、こうした行為との相違を明らかにしてほしい。

〔第一の質問への答え〕

この質問は五つに分類される。

1. 預言者とイマームに対し祈ることは、シルクであるか否か。
2. 聖なる土に病気の治癒を祈願することはシルクであるか否か。
3. 聖なる土を用いて礼拝することは、シルクであるか否か。
4. 堂宇や講堂を建立することは、シルクであるか否か。
5. もし、こうしたことがシルクでないとするれば、あれほど、イスラームとコーランが戦っているシルクとは何であるのか、これらの行為とシルクを区別するため、シルクはいかなる意味があるのかを知りたい。

我々は、今一つの質問をこれにつけ加える。すなわち、墳墓を崇拜することは、果してシルクであるか否かということである。

〔目的を明らかにするための前提〕

これらの質問の解答は、シルクという語の意味内容およびその諸相やイスラーム以前のアラブ人や非アラブ人の思想信条を理解することにより、そうすれば、コーランとイスラームがいかなる思想信条と闘争したかが明らかと

なるので、ある程度、この問題を取りあげることになる。読者が、これから述べることに以上詳しいことを知りたいのであれば、宗派誌や歴史、伝記類を参照すべきである。

〔マジュースの徒におけるシルクの解説および簡単なその信奉者の説明〕

シルクという語の意味の一つは、世界に対し二つの原理が存するとするところのものである。その二つの原理の一つは、神であるところの光であり、いま一つは、アフリマンと呼ぶところの闇である。本来のマジュースの徒は神を永遠なるものとみなし、アフリマンを偶存的とみなした。また、善にかかわるところのことは神に帰し、悪にかかわることはアフリマンに由来するとみなした。このため彼等の中でアフリマンそのものの出現について意見の相違があった。カイヨーマルス派というこの宗派の一つは、アフリマンを神なる光の悪い思念から生れたとみなした。ザルブーン派やザルドシュト派は、それぞれ奇妙な思想を持っていた。

〔二元論派の解説〕

この派の徒は、二つの無始永遠の原理の存在を主張する。これら二つの原理は、それぞれ無始永遠性において同等であるとするが、実体・本性・働き・位置・場・質料・物質・精神上は対立しているとする。この派に、アルダシールの子シャープールの時代に現われ、ホルモズの子バフラムが殺したマーニーの信奉者達が属する。彼等はイエスの後に現われた、そして世界を知力と力と感性を有する二つの無始永遠の原理の被造物とみなしたのである。そして、その二つは、靈魂と形相と働きと支配的意図の上で対立し、場の上でも対立しているとみなした。彼等は、光の実体は、善で高貴で、しかもよ

い香りを持ち、美しい姿を有し、善なる意図を有し、叡知を有し、恵みをもたらすものであり、その行為は善く、かつ正しく、好ましく、整然としていて、その場は天上にあると考えている。そして、闇の実体は、これらすべての事柄について光の実体とは別のもので異なっているとみなしている。光と闇のそれぞれには、五つの元素が存在し、その五つの元素とは、四つの物質と一つの非物質的精気である。光の物質とは、火、光、風、水の四つであり、非物質的精気とは、これらの物質の中において、動因として活動する微風のことである。闇の物質とは、火焰、闇、狂風、霧の四つでありこちらの方の非物質的精気とは、これらの物質の中において動因として活動する煙である。他にも奇妙な思想信条を彼等は持っていたのであるが、それらについては述べないでおく。

〔マツダクの説明およびマツダク派の教説〕

マツダクは、アノーシールワーンの父クバードの世に現われ、クバードを自分の宗教に招じ、クバードもまた受け入れた。アノーシールワーンは、マツダクを殺害した。マツダク教徒もまた奇妙な教説を持っていた。彼等の説のうちには次のようなものがある。すなわち、彼等は二つの原理を認めている。さらに、マツダクは、「私の神は天上界にいて、あたかも下界においてホスローが座るが如くに玉座に座っている。そして、神の御前には、あたかもホスローの御前に、モーベド（司祭）、大ヒルバド（大僧正）、エスバフバド（将軍）、ラーミシュガル（楽人）の四人がいるように、識別力、理解力、記憶力、楽しむ力の四つの力がある。」と言ったと伝えられる。そして、この四つの力は、七つのものによって世界の事柄を支配する。七つのものとは、すなわち、サーラール（大将）、ピーシュカール（代理人）、バールゲン（密偵）、バルワーン（木星）、クールダーン（水星）、ダストゥール（拝火教の高僧の役職者）、クーダク（奴隸）である。この七つが十二の精霊、

すなわち歌い手、与え手、奪い手、運び手、食い手、走り手、立ち手、殺し手、生かし手、おこない手、来手、成り手の中において巡回している。誰でも人は自らのうちにこの四つのものと、七つのものと十二のものを集めることができれば下界の支配者となることができ、その人は責務から解放されるという。マツダク教徒の中にはディーサーン派、マルキヨン派、カイナウィー派および輪廻論者のような諸派が存在する。それぞれの説を述べると長くなる。マジュースの徒は拝火堂（アーテシュカデ）を建設した。最初の拝火堂はファリードゥーンがトゥースに建てた。その後、順次ボハーラー、シジスターン、支那の東部、ファールスに拝火堂が建設された。これらの拝火堂はゾロアスターの現われる前に存在したのである。ゾロアスターもまたニーシャープールやその外の地に拝火堂を建設した。

〔妄想の徒と諸派〕

これらの人々は、敬虔な宗教者や預言者達と対立している。彼等は自らの本能、理性、純粹意識を信じた。彼らの中のある一派が唯物論者ダフリューンである。彼らの理性は可感物以外の他の物には彼等を導いて行かなかった。他の一派は創造と復活を認めたが他の事柄は自らの理性に従って実行した。まさに現代の思想家達の一部が、またこの一派を模倣しているのだ。彼等自身の考えでは、この思想は新しいものであるが、この思想は数千年前に預言者達はその論拠をつぶしてしまった。すたれてしまったものであることを知らないで、彼等の無教養な脳に浮んだものなのである。

〔ハルナーン派の信条と教説〕

これらの人々はマジュースの徒の一派であり、キリスト教の三位一体説と二元論者の多神教とを総合し、五つの原理を認めている。その五つとはすな

わち「創造者」と「靈魂」に相当する生命と能動因の二つと、「資料」である受動因が一つ、「時」という非能動的なるものと「空虚」という非受動的なものの二つとである。彼等はさらに奇妙な教説を持っているのだが、ここではそれについて述べることを控えておく。

〔シルクのもう一つの意味と多神論者の諸派〕

シルクのもう一つの意味は、信仰におけるシルクである。それは、すなわち一つ以上の神を信仰することである。すなわち、神々を崇拜すること、もしくは神々の姿を崇拜することである。そこで、これから信仰の意味を明らかにしよう。多神教徒の多くの派はこのようなシルクの信仰を持っている。彼等の中には二つの大きな派がある。一つはハイカル（ハヤール）の徒と呼ばれ、もう一つはアシュハース（ベルソナ）の徒と呼ばれる。

〔ハイカルの徒の教説〕

これらの人々は、偉大な神を信仰崇拝することは人間にはできないことだと考えた。さらに、信仰崇拝においては人間は仲介者を必要とし、その仲介者を信仰し、その信仰を通じて偉大な神に近づこうと考えた。そこで、彼等は純粹離存靈を認め、それらが世界を主宰するとみなしたのである。さらに、それらのものを信仰することを欲したのであるが、それらのもの、すなわち純粹離存靈が目に見えないことがわかった。そこで、何か目に見えるものを信仰することが必要であるとみなし、その結果、ハヤール (hayākil:pl of Haykal) すなわち星辰に向けた。そして、各々の靈的存在を星辰の一つと関係づけて考えた。ハヤールを純粹離存靈の身体とみなした。純粹離存靈の身体に対する関係は、あたかも人間靈魂の人間身体に対する関係のようなものであるとみなした。そして星辰を純粹離存靈の生命をそなえた

生けるものとみなしたのである。彼等は身体に近づくことは純粹離存靈に近づくことであり、星辰を崇拜することはそれらの靈を崇拜することであり、人間を偉大な神に近づけると言ったのである。そこで七曜星に対し儀礼を設けた。そして、第一にそれらの星の位置、星宿およびそれらの名称を決めた。第二に、それらの昇る位置と沈む位置を決め、第三に、それらの性質に順じて、それらの関連性とそれらの対応性や対立性を決め、第四にはそれらの星辰にもとづいて昼と夜と時間を分け、第五にはそれらにもとづいて形姿や人格や気候や都市を定めた。そして祈りや呪文や紋章をつくり、また各々の遊星の姿にもとづいて指輪をつくり、ある遊星の日や時刻にそれをつけ、その星専用の衣装をまとい、香をたいた。各々の礼拝をそれぞれの時刻に行なった。そして各々の星に願いごとをした。彼らは各々の星に特別な願いごとを決めていた。星辰を神々とみなしたのである。そして主神を主の中の主 *rabb al-arbāb* とか、神々の神 *ilāh al-ālīhah* もしくは *khodā-ye khodā-yān* と呼んだ。彼等のうちのある者は、太陽を神々の神とみなした。魔術とか占いとか占星術とか呪術や護符の指輪は彼等の学に由来するものである。

〔アッシュハースの徒の教説〕

これらの人々は、靈的存在が神々であり、それらは偉大なる神の御もとにおける仲介者であるが、見ることもできず、それらに話しかけたり、対話したりすることはできないと言う。そこで、彼等は星辰による以外はその靈的存在に近づきえないと言う。しかし、星には昇り下りがあり、常にそれらの星を見ることはできないし、それらと対話することもできない。したがって星々に近づくこともできない。それ故、やむなく、七曜星の想像上の姿をつくり、偶像をつくった。そして、偶像を信仰崇拜し、それらの偶像が彼等を七曜星に近づけ、七曜星が彼等を靈的存在に近づけ、小さな神々であるところの靈的存在が彼等を偉大な神に近づけるといふ。各々の偶像はそれぞれの

星に対応した金属で本体ができていた。そして、それらの偶像が神の御前における調停者であるとして、称賛崇拜にいそしんだ。彼等は星の時刻や分や等級や外合、内合に注意し、それが自らの願いごとの決定にかかわるとみなした。彼等は下級の災害をもたらす事物の創造行為は神と関係がないとした。彼等は神はこれらのものを創り出すにはあまりにも偉大すぎるといった。そして、そういうものの創出は星の合や偶然的な元素の混合に由来するとみなした。彼等には、多くの教説、信条があるがここでは述べないでおく。

〔ジャーヒリーヤ時代のアラブの教説〕

ジャーヒリーヤ時代からイスラームの出現までのアラブの教説は数多くある。それらのうちの一つの派はダフル派であり、この派は自然を生命授与者、時間を抹殺者とみなし、死と生を元素の合成、分解とみなし、元素を集めるものを自然、分解するものを時間（ダフル）と呼んだ。彼らのうちのある一派は神と創造の始源を認めたと、復活と預言者の派遣を否定した。またある一派は神と復活をある程度は認めたと、預言者を否定し、偶像を信仰した。アラブ人達の疑問は、一つは預言者の派遣をめぐるものであり、一つは死後の肉体の復活をめぐるものであった。彼らの詩に次のように詠っている。

酒の楽しみを一日ほどでも捨てられようか

約束された乳とぶどう酒のために。

生と死と復活とは

アムルの母よ、迷信の物語りさ、

〔アラブの教説の源とその歴史〕

広肩のシャープール(Dhu al-aktāfのシャープール、サーサーン朝十代目皇帝)の治政の初めころ、アムル・ブン・ルハイがメッカにおいて部族の長となりカアバ神殿の支配権を握った。彼はシリアに旅し、バルカー(現在ヨルダン)の町で偶像崇拜をしている民に出会った。そこで彼等に詳細を尋ねたところ、彼等は自分たちの教説を述べた。それが彼に気に入ったので、彼らに一つ偶像をくれるよう求めたところ、彼等はフバルの像を与えた。アムル・ブン・ルハイはこの土産をシリアからメッカにもちかえりカアバに据え、人々にそれを崇拜、信仰するよう呼びかけたので、メッカに偶像崇拜が広まったのである。そしてアラブの各部族はそれぞれに偶像をつくり崇拜し、偉大なる神の仲介者、とりなし者とし、それに願かけをした。

〔アラブの諸部族の名称とその偶像〕

彼らの偶像の名称とは次のようなものである。ワッド、スワーア、ヤグース、ヤウーク、ナスル、ラート、ウッザー、マナート、フバル、イサーフ、ナーイラ・ワッドをカルブ族が崇拜していた。カルブ族はドゥーマト・ル・ジャンダルにいた。スワーアの神はフザイル族のものであった。ナスルはズル・キラア族のものであった。ヤウークの神はハムダーン族のものであった。ラートはサキーフ族のものであった。ウッザーはクライシュとキナーナ族とスライム族のものであった。マナートの神はアウス族とハズラジ族とガッサーン族のものであった。フバルは巨大な偶像でカアバ神殿の屋上に建てられていた。イサーフとナーイラもまたアムル・ブン・ルハイがサファーの地とマルワの地に建てた。キナーナ族のミルカーン支族にはサアドと呼ぶ偶像があった。アラブの中には別の信仰をもった他の部族がいた。ユダヤ教徒の一団とキリスト教徒の一団とサバ教徒の一団がいた。またある民は天使を崇拜してい

た。ある部族はジンを崇拜していた。そしてそれらを神の娘達とみなしていた。

〔イスラーム以前アラブのキリスト教徒の教説〕

イエスが昇天したのち、使徒と他の人々はイエスについて意見が異なった。彼らの根本的な相違点は二つある。一つはイエスの降誕と母との関係についての問題であり、他の一つはイエスの昇天と天使との関係についての問題である。イエスの降誕の問題については、いろいろの説や信仰がある。ロゴスの化肉についてキリスト教徒の間に迷信が広まっているがそれを述べる必要はない。彼等は至高の神に対し三つの位格 (uqnūm) があると主張する。神を本体 (ジャウハル) において 1、位格 (uqnūm) において 3 とみなす。ウクヌームとはシリア語である (syriac, qnūm)。その意味は根源ということである。彼等は神の本質において、存在のウクヌームを父と呼び、知のウクヌームを子と呼び、生命のウクヌームを聖霊と呼んだのである。彼等は知が物体化し、イエスは神の唯一の子である、すなわち神の一人息子であると信じた。キリスト教徒は 72 の派に分かれた。そのうち重要なものは三つである。その一つ、マルカーイ派はキリストの完全な人性と永遠性を信じ、マリヤが永遠なる神を産み、キリストを神の息子で非創造物で父なる神と同類であると信じた。また、ネストリウス派という一派が存在する。これらの人人は、三つの位格を神の本質に付加するものとも、神の本質と一体化しているともみなさなかつた。彼等のうちのあるものは、三つの位格を神とみなした。またあるものはイエスが神であると同時に人であるといった。そして、神性と人格が一体化しているとみなした。また、もう一つの派はヤコブ派である。彼等は三つの位格をそのまま認めたのであるが、神性が人性に変化したと主張した。したがって神がキリストになったのであり、キリストはまさに神であり、神が物体化したと主張した。彼等のあいだでは、奇妙な信

仰があるが、それは述べないでおく。以上が、イスラーム出現までのアラブと非アラブの人々の教説と信条の要約である。

〔イスラームとコーランは何者と戦ったか？〕

ここでは、コーランの聖句から章と句の番号を示しながら例をあげていこう。そうしてシーア派のみならず、すべてのムスリム、さらにすべて敬虔な信仰を持つ者、さらに宗派に属していようがいまいが世界の理性ある人々が実践している儀礼、習慣のうちで、コーランとイスラームが戦ったところのものとは区別されるべきものを明らかにしよう。その結果、無分別や無知、あるいはこの社会における無軌道な連中の野心や策謀が明らかになり、すべての人々が国民や国家に対する詐欺師や裏切り者が誰であるかを知るであろう。そして、ペルシャ語を話すイラン人の清い意識と健全な性質に判断を委ねよう。本稿は彼等の信仰と宗教と祖国のために書かれたものなのである。そして、真理が明らかになった後に、イラン人民の聖なる宗教を本当にいやしめ、中傷し、その宗教の聖なる教えの数々のいずれをも無視してしまっている者の命運を信仰厚く勇敢な若者達の英雄的気概に委ねることになろう。そうすれば、フェールス州の拝火堂やゾロアスターの信奉者やマゾダクの信奉者の拝火堂から立ちのぼった災厄の火が消えるであろう。もしも、怠慢に過すならば、一握りのこれらのごみくずがマジユースの拝火堂の火の粗朶となり、人々をガブルの宗教（拝火教）に誘うようになるのを見るだろう。私はこの有毒な教説の中心地をよく知っている。彼奴らの目標をよく調べた。そして、この山師どもの思想的根拠を手に入れている。以前から、四千万の敬虔な人々の感情に向ってこれらの愚劣な思想が理性のない小さな脳みそから出てにじみ込んでいるのを知っている。近い将来しかるべき時に、彼等の不徳を暴露し、国家と国民がそれに近づくとしよう。

〔ダフルの徒を批難する聖句の例〕

その当時、イラン人やアラブやインド人の多くは偶像崇拝者で、ダフルの徒や自然崇拝者は比較的少なかったので、コーランの章句もダフルの徒との戦に関するものは比較的少なく、むしろ偶像崇拝により多く反対している。このような事情にもかかわらず、ダフルの徒の批難に関する聖句があり、その例を挙げれば充分である。前述の多神崇拝の徒の諸派各々についてコーランの聖句の例を引くこと、さらに多く求めるものがあれば、コーランそのものを参照しなければならない。

四十五章（腰抜けども）二十三

「どうせこの世は一生かぎり、生きて死ぬ、ただそれだけのこと。『時』がわしらを滅ぼすまでのこと」などと彼らは言う。この連中はなにも知らずに推測でこういう道を進んでいる。

この聖句はジャーヒリーヤ時代にこのような信仰を持っていたアラブの一部を批難している。ジャーヒリーヤ時代のアラブの教説の項を参照しなさい。人々を本来の姿にたしかえらせようとし、よく考えることを命じている聖句の一部もまたこの一団の批難に関するものである。

〔二つの神を認める者どもの批判に関する聖句の例〕

一般的に二つの神もしくはそれ以上の神の存在を主張する多神教徒を批難したり、あるいは世界における神の唯一性を立証する聖句はコーランの中に数多くある。

二十一章（預言者の章）二十二

天でも地でも、アッラー以外に神があるとしたら、天地はその秩序を失ってしまうであろう。神は至高にして、玉座の主は形容を越えている。二十一章二十四、アッラーをよそにして他に神々を見つけたとでもいうのか、言ってみよう、「お前らの証拠を出してみよ。」と。

タウヒードの章（コーランにはタウヒードという言葉はないが、誠心の章（百十二章）をタウヒードの章と呼ぶことがある。）、追放の章（五十九章）の終りの聖句、および他の多くの聖句はこういう主題のものである。世界の神を、神について述べられていた諸々の事柄から否定聖化しかつ肯定聖化しているこれらの聖句の中に、二元論やマツダク教に対する批判が存在する。彼等の教説を参照せよ。同じく、多神教を批判する聖句も、そういう内容のものを含んでいる。

〔星辰崇拜の批難に関する聖句の例〕

信仰上の多神教や一般的にいわれる多神教について多くの聖句がそれを論難している。これらの聖句はまた星辰崇拜の徒をも含めたものである。そして、特に星辰崇拜についても聖句がある。その例は家畜の章（六章）の七十六。

すなわち、夜のとばりが彼の頭上にうち拡がった頃、彼は一つの星を見て、「これぞ我が主じゃ」と言った。だが、やがてそれが沈んでしまった時、「わしは姿を没するようなものは気にくわない」と言った（七十七）。それから月が昇って来るのを見た時も「これぞ我が主じゃ」と言った。だがやがてそれも沈んでしまったので「やれやれ、神様が手引きして下さらなかつたら、危うく迷いの道に行くところだった。」と行った（七十八）。それから、太陽が昇ってくるのを見て、「今度こそ我が主じゃ。これが一番大きいから」

と言った。だが、これもまた沈んでしまった時、彼は「これ、皆の衆、これでわしはお前たちの崇拜しているものとはきっぱり縁を切ったぞ。」

イブラーヒームは（日、月、星辰の）没入という論拠によって星の崇拜者や月や太陽の崇拜者を断罪した。コーランはイブラーヒームの論拠をアラブの多神教徒の論駁のために伝えていて、「夜のとばりが降りると、イブラーヒームは星を見た。これこそ我が主であろう。」と言った。星が沈むと、「神は沈んだりしない。だからこれは神ではない。」と言った。同じく月と太陽を神格から降してしまい、世界の神の唯一性を自らの民に教えたのである。

〔偶像崇拜批難に関する聖句の例〕

アラブの多神教徒は周知のとおり、多くは偶像崇拜者であり偶像を信仰、崇拜していたので、コーランの聖句も多くは彼等に関するものであり、おおむね彼等の宗教を論難している。コーランの章の大部分において、種々の証明により彼等を批難している。

ユーヌスの章（十章、十九）

「彼らはアッラーを差し置いて、何の毒にも薬にもならぬものを崇めている。そして、『この神々が我々をアッラーに執成して下さる。』と。言つてやるがよい。『これ、お前たち、天にあること地にあることで、何か御存知ないことをアッラーにお教え申すつもりなのか。』と。ああ、勿体ない、かしこくもアッラーは彼らの崇める邪神どもとは較ぶべくもない高みにおわします。」

預言者の章（二十一章、三十七）

「不信者どもは、汝を見さえすれば、必らず嗤いものにする。『おい、この男か、君たちの神々をあげつらっているのは』と。お情け深い御神のせっかくのお諭しも彼らには一向有難くない。」

同じく預言者の章（二十一章、四十四）

「一体彼らは、我ら（アッラー）の下す天罰から自分たちを護ってくれる神々でももっているというのか。そんなもの（邪神たち）など、自分の身を守ることすらできはせぬ、かたみに助け合ったとて我らの攻撃を防げるようなものではない。」

偶像を破壊し、偶像崇拜の徒と論争したイブラーヒームの主張はこの章の中に見られる。この同じ章（九十八）において、

「お前たちも、それからお前たちの崇めていた邪神どもも、ジャハンナムの恰好な焚ぐさ。さあ、はいつて行け。」（九十九）「もしあれが本当に神だったら、まさか地獄に落ちたりはしなかったであろうに。だが、みんなそこに入りこんだまま、いつまでも出てこれないのはどうしたことだ。」

〔アラブの偶像の名称をあげている聖句〕

アラブの諸部族が各々に偶像を作り、崇拜、信仰したのはすでに述べた。ここに、はっきりと偶像の名前をあげている聖句を引用しておこう。

ヌーフの章（七十一章）

二十一、そればかりか大それた悪だくみをたくらみ、二十二、「どのようなことがあろうとも、己が神々を棄てるなよ。ワッドヤスワーア、二十三、ヤグースヤウークヤナスルを棄てるなよ。」と励まし合ひ。

〔キリスト教徒に関する例〕

食卓の章（五章、七十七）

「まことに、神こそは三の第三」などと言う者は無信の徒。神というからにはただ独りの神しかありえぬはず。

神を三位（すなわち、父と子と聖霊）から成る一と主張する者達は不信者である。神は一つでしかないのである。

女の章（四章、百六十九）

「これ啓典の民よ、汝ら宗教上のことで度を過ぎてはならぬぞ。アッラーに関しては真理ならぬことを一言も言うてはならぬぞ。よく聞け、救い主イエス、マルヤムの息子はただのアッラーの使徒であるにすぎぬ。またアッラーがマルヤムに託された御言葉であり、アッラーから発した靈力にすぎぬ、されば汝ら、アッラーとその遣わし給うた使徒たちを信ぜよ。決して「三」などと言うてはならぬぞ。差し控えよ。その方が身のためにもなる。アッラーはただ独りの神にましますぞ。ああ勿体ない、神に息子があるとは何事ぞ。

食卓の章（五章、十九）

「神はすなわちマルヤムの子メシアである。」などと言う者どもは、まぎれもない邪宗の徒。

改悛の章（九章の三十）

「ウザイル（エズラ）は神の子」とユダヤ教徒はいい、「メシアは神の子」とキリスト教徒はいう。

この問題についての聖句は多く存在するが省略のためそれらを記すことは控えておく。

〔野心家共の口実〕

理性に欠ける野心家共は、何も知らぬ無知のためか、あるいは、知りつつ大衆を欺くためか、コーランのある章句を逆の意味にとって敬虔な人々の口にねじ込もうとしている。そしてそれによって自らの嘘八百をとりつくろうとしている。今ここに、その聖句そのものを正しく引用し、裏切り者の手のうちを明らかにしよう。この聖句もまた偶像崇拝者やキリスト教徒の教説を論難するものに属していることが明らかになるだろう。

群なす人々の章（三十九章、二～八）

二、すなわち、我らは汝にこの啓典を真理をもって下した。されば汝もただ一筋に信仰のまことを尽しアッラーにお仕え申せ。

三、真に純一無雑の信仰といえは、ただアッラーの信仰よりほかはない。

四、アッラーをよそにして、沢山の御主人（神々）に仕えている人々の言い分では、「わしらが、この方々にお仕え申すのは、ただただ、この方々のお力添えで少しでもアッラーに近づけていただきたいから。」というが、とにかく、彼らがああだこうだと言いつけている点については、いまにアッラーがはっきり黑白をつけて下さるであろう。

五、アッラーは嘘つきの不信者を絶対に導いては下さらぬ。

六、もしもアッラーがお子が欲しいと思われたら、いくらでも御自分の創造し給うものの中から好きなものをお選びになれるはず。神は清い方で、ただ独りの神、絶対者におわすアッラーであるのに。

これに続く二つの聖句で天地の創造と人間の創造を指摘したあとで、さらに、

八、こういうお方がお前たちの主、アッラー。一切を掌握し給うお方。この他に神があろう道理がない。さ、それなのに、お前達なんぞそう傍見ばかりしておるのか。

さて、読者はこの聖句の訳を見て、ジャーヒリーヤのアラブ人の、偉大な神に近づけられようとするために神々を信仰崇拝していたという教説およびキリスト教徒の、メシアを神の息子とみなしたり、ある時には神そのものと見なしていたという教説を考えれば、これらの聖句もまた神々を崇拝していた多神教徒を批難し、神に対し息子をデッチ上げたキリスト教徒を批難している聖句に続くものであることが明らかになる。

〔信仰と謙遜の区別〕

さて、コーランとイスラームがいかなる誤まった信条や思想と戦ったかが明らかとなった。それは複数の神の存在を主張する者、偶像崇拝、星辰崇拝、およびこれに類した数百の奇怪な思想と戦ったのである。まさに、ある短い章では内容全体が不信者について述べたものもありである。不信者

の章（百九）では、「言うがよい、『不信者どもよ、お前らの崇めるものをわしは崇めない。わしの崇めるものをお前らは崇めない。』』とのたまひ、そして「お前らにはお前らの宗教、わしにはわしの宗教」とのたまふ。これは、すなわち、私は偶像崇拜を選ぶつもりはないし、またあなた方も、神を信ずる者とはならないであろう。したがって、あなた方は、あなたの宗教と共にあり、私は私の宗教と共にある。世界の神は各々に報いを与えるだろうということである。

ここで、信仰と謙遜の区別を明らかにし、その二つのうち一つが不信仰で多神崇拜であり、コーランとイスラームがそれと戦ったものであり、他の一が信仰と善行であり、コーランとイスラームがそれを命じているのであることを明らかにしよう。

賢明なる読者はペルシャ語を母国語とするものであり、またその大部分はアラビア語をも知っている。信仰（‘*ibādāt*）という語は、‘*ubūdiyat*（追随）という語から出ている。すなわち、服従の表明ということであり、これがペルシャ語では、*parastesh* およびアラビア語の ‘*ibādāt* は（もともと）あるものを、それが大きな神であれ小さな神であれ、神として讃えることを意味している。多神教徒がまさにこうであった。彼等の教説はすでに明らかにしてある。そして、謙遜 *tawādu‘* という（アラビア語）はペルシャ語では、*furūtanī*（へり下ること）であり、‘*ibādāt* とは別な言葉である。この区別はペルシャ語およびアラビア語におけるこの二つの語の使用例を参考にすれば明らかになるとおりである。あなた方も、そして世界のすべての理性ある人々は昼も夜も多かれ少なかれ、通りでいく人かの友達や目上の人や尊敬する人と出会ったり婦人達と出会ったりする。その場合、しかるべき敬意を表わし、各々の人々に応じて謙讓、謙遜、恭順の意を表わすのであるが、それはあなたがその人の従僕となったのでもなく、その人を信仰しているので

もないし、またその人があなたの崇拜の対象となったのでもない。謙遜や恭順はあらゆる国民や国の賢者や学者が人間の最も重要な徳性の一つとみなしており、そういう言葉で形容されることが多い者は誰でも人々により一層称賛される。神以外のものの信仰や他の存在者の崇拜は批難されていると同時に、世界のあらゆる国民の間で、宗教上の指導者や現世的指導者に対する常識的な尊敬の儀礼が取り行なわれている。また人間のあらゆる集団において、多少とも宗教上秀でた者や現世的な意味ですぐれた者に対する敬意、謙遜、恭順が認められている。そうしてみると、あらゆる人間が不信者で多神教徒であるといわねばならず、そして尊敬とか謙遜という言葉が世界の辞書から消されてしまい、すべての人々が互いに出会う時に、まるで動物のように無視し合うようにならないかぎり、多神崇拜から免かれえず、タウヒードを実現できないことになる。ワッハーブ派の徒とイランにも取るに足らぬほどの数があるその信奉者達は、自らと同宗の者と出会った時、どのようにふるまっているのだろうか。彼等は全く謙遜も尊敬も示すことなく、まるで動物のように面会が行なわれている。か、あるいは、しかるべき敬意の表明行為や人間的な習慣が実行されているのであろうか。後者の場合、自分と同様な人間を信仰したことになるのであろうか、神以外のものを崇拜したことになるのであろうか、多神教になってしまったというのか、それともそうではないのか。もしも、信仰は恭順や謙遜とは別ものであるとやむをえず言われるとすれば、その区別が明らかにされ不徳や裏切りが暴露されるようになるであろう。

〔この問題に関するコーランからの証明〕

最も重要な謙遜の表明であり、最も高次の服従の表明の儀礼は平伏(sajdah or sijdah)である。この平伏を、神以外のものに対して認めていないのは、イスラームのシャリーアの中に神が禁じているからである。あらゆる敬意の表明方法のうちで最もすぐれており高次のものであるこの平伏でも、

信仰、崇拜の目的で行なわれたのでなければ、多神崇拜とはならない。否、むしろ時として、神の命令への服従であり義務であることがある。コーランにおいて、再度にわたり天使のアダムへの平伏が指摘されている。その例を引いておこう。

牝牛の章（二章三十二）

かくて我ら（アッラーが）天使に向って、「ひざまづいてアダムを拝せよ。」と言え、彼等はすべて跪拜した。が、ただひとりイブリースだけは、傲岸不遜にもそれを拒み、かくして背信の徒となった。

神以外のものに対して謙遜の意を表わすことは多神崇拜であると主張するものは、この問題についてイブリースを除いてすべての天使が不信者で多神崇拝者であり、この命令を下した神を誤まっているとみなし、どうして天使達を多神崇拝に誘い、敬虔な唯一神信仰者のイブリースを咎めたのかと批難する。おそらく、天使達のアダムへの平伏は神の命であり、多神崇拜とはならない。だが神の命令に基づかない敬意の表明は多神崇拜であるといわれよう。

この言い分についての答えは、次のようになる。まず第一に、天使の平伏がアダムの神格化の崇拜のためにであったとすれば、たとえ神が命じたにしてもそれは多神崇拜である。勿論、神もこのような命令を下すことなどありえないことである。これは多神崇拜への使喚であり、理性に反することだからである。そして、これが崇拜のためでないとするならば、たとえ神が命令したのでなくても、多神崇拜ではない。第二に学者や目上の人に対する謙遜や敬意の表明は命令が必要なことではない。むしろ、人間の導き手である理性そのものがこのような行為に通じてゆくのである。そのことを証明するのは、世界の宗教を信じる賢者達の誰も習慣的な敬意の表明のために神の命令

を期待したりしていないということである。勿論、もしも神がある種の謙遜の表明法を禁じたとすれば、たとえ多神崇拜でなくても、従わなければならない。たとえば、神以外のものへの敬意の表明のための平伏を認めていないように。だから、もしもある人が敬意の表明のためにある目上の人に平伏したとすれば、彼に罪ありとみなすのであり、彼を多崇拜者とか不信者とかみなさないにしても、彼は神信仰からはずれていると考えるのである。第三に、われわれは、信心深い人々や預言者や宗教上の指導者達のような信仰に秀で、徳の高い模範的人物に対しては、コーランの食卓の章（五章、五十九）の聖句にあるように、神の命によって敬意を表わし、謙遜の意を示すのである。

これ汝ら、信徒の者、汝らもし己れが宗教を棄てるようなことをしたら、アッラーはきつと（汝らの代りに）別の集団を興し給うぞ。すなわち、アッラーに愛され、アッラーを愛し、信仰者たちに向っては心を低く、無信仰者には権高な……………人々を。

dhillat（心を低くすること、アラビア語）ということは、最も高次の謙遜と恭順のことであり、それは神が愛し、神を愛する人々の特性なのである。そういう人々は、神を信ずる者や同宗に対しては、限りなくへり下り謙虚であり、且つ、異教徒や不信者に対しては自尊心と矜持心でもってふるまう者達なのである。

〔神の言葉による別な証明〕

今ここに、コーランの聖句と世界の神の言葉が、これ以上の議論の余地なく、つまらない御託を並べたてる連中にとやかく言う術のないことを示してくれるであろう。

ユースフの章(十二章、百一)

そして父母を玉座に昇らせれば、一同、ユースフの前にがばとひれ伏す。彼はやおら口を開き、「御覧下さい、お父上。昔、私の見た夢は、ほれこの通り正夢でございましたな。夢見たことをそのまま現実として下さったのは、^{かたじけ}忝なくも主でございますぞ。

この聖句はヤコブとその子らがヨセフに会った時のことを述べていて「そして父母を玉座に昇らせ、一同がユースフの前に平伏し、父よ、これこそ以前見た夢が解き明かされたのです。神が実現することを望まれたのです。」と言ったのである。さて、果して預言者ヤコブおよびその子等を多神教徒とみなさねばならないであろうか？ 多神教徒を預言者に選び出した神は誤ったとみなし、批難せねばならないであろうか？ それとも平伏という行為をその当時一般に行なわれていた敬意の表明方法であり神もそれを禁じていなかったとみなし、これらの清浄の人々を穢れや不浄の語でもって後世に伝えるべきではないのであろうか？ 多くの聖句の中において、謙讓に対立する高慢が厳しく禁じられている。

たとえばコーランの十七章三十九節(夜の旅、イスラエルの子等)、

「それから地上をあまりいい気になって闊歩するでない。」

三十一章十七節(ルクマーン)

「それからお前、仮にも他人に頬をそむけて見せたり(激しい軽蔑のしるし)、地上をさも偉そうに闊歩したりしてはいけない。やたら威張りちらし、偉がる者はアッラーの好み給うところではない。」

三十一章十二節(ルクマーン)ルクマーンの叢知を説明するところで、

「我が子よ、アッラーとならべて他の神々を拜むようなことをしてはならない。多神崇拜とは実に重大な罪悪なのである。」とも言われている。すなわち、自らの顔を遜大な態度で人々からそらせてはならない。また地上を遜大

な態度で歩いてはならない。おごり高ぶるものを好まない、ということである。

もしも謙遜や恭順が多神崇拜であるならば、賢者ルクマーンはこの神命に対し誤った道を歩んだことになり、全く矛盾した裏腹なことを言ったことになる。

〔読者にもとめる判断〕

さて、ここに読者諸賢にいずれをとるか審判をあおぎたい。すなわち、アダムへの平伏を呼びかけ、多神教徒、すなわち天使達を敬虔なる者と呼び、しかも、多神崇拜の行為である平伏という荷を肩からおろしたイブリースを非難し不信者と決めつけ、自らのそばから遠ざけ、多神教徒のヤコブを預言者として選び、神を信ずる者に謙遜の意を表わす多神教徒達を自らの友とみなした神は誤ったと主張すべきであろうか。さらに天使も預言者も、全世界の賢者も多神崇拜をしていると主張すべきであろうか。そして、あらゆる存在者のうちでイブリースのみが神にのみ平伏を行なった唯一神信仰者とみなすべきなのであるか？われわれは他人に謙遜と敬意を表するような手段をもっていないのだろうか？

それとも、一握りの無教養なもの書き達がそのまねをしているイブン・タイミーヤ、ムハンマド・ブン・アブドール=ワッハーブ、そして知恵も知性も知識も宗教心も全くないナジュドの蒙昧な一群の人々の言うことを認めず、彼等が誤っているとみなすべきなのであるか？

さてここに、議論を終わらせるために、ワッハーブ派とその追随者達の根拠のない言い分を各々引用し、それについて解答を与えていこう。

〔第一の問いとその答え〕

第一の問いは「預言者やイマームに願いごとするのは多神崇拜であるか否か」というものであった。読者は多神崇拜の意味を理解した後では、この問題に自ら答えうるであろうし、長い説明は不要であると思うのであるが、真実と出鱈目を明確に区別するためには、それに答えるにやぶさかではない。

預言者やイマームや誰でも神以外のものを神的なものとして、願いごとをし、願いごとを単独で実現するとみなしたとすれば、それは理性とコーランが証明しているとおりに多神崇拜である。しかし、もしも、そういう神的なものでないとして、願いごとをするのであれば、丁度全世界の秩序が、個々の人間がお互いに要求を満たし合うようになっており、世界の文化の基盤は個々各々の相互協力に基づいて成立しているとおりに、それは多神崇拜とはならない。

もしも、何者かに願いごとをするということが無条件に多神崇拜であるというのなら、世界の存在者はすべて一様に多神崇拝者で、世界の基盤は多神崇拝の上に積み重ねられていることになる。すなわち預言者達もまた、日々の糧を必要としていたのであるし、自らも世界の人々に願いごとをしていたし、隊商の合力事業で日々のたつきを得ていたのである。

〔どんなことが神の御業か〕

おそらくあらゆる願いごとの行為が多神崇拝の行為だというのはなく、むしろ人間の能力を超えた願いごとをすることが、多神崇拝であるといわれるであろう。別な言い方をすれば、神以外のものに神的な行為をもとめることが不信で多神崇拝の行為となるということである。

この問題の答えは、まず神的でない行為と神的な行為とを分かち、日常行為のすべてが神的でないのでもなく、日常的でない行為のすべてが神的であ

るといってもないことを明らかにすることにある。

さて、神的な行為とは論証と直観によれば、行為者が自己以外の何ものかの介在なく、他者の力に助けを求めることなく実行するところの行為である。別な言い方をすれば神的な行為とは、それを行なう者が行為の実行において他者を必要としない完全な独立者であるようなものということになる。神的でない行為というのは以上のようなものではない。たとえば、創造し糧を与え、あるいは病気や健康を与える世界の神は、自らの行為に他者の力の助けを求めたりしない。また何ものも、神の行為に全体的あるいは部分的介入をすることがなく、神の力と能力は他のものから借りたり獲得したりしたものではない。神以外のものが何か行為を行なう場合は日常的で簡単なものであれ、日常的でなく困難なものであれ、その能力はその者自らに由来しているのではなく、自らの力でその行為を実行しているのではない。

したがって、もしもある者がいかに些細なことであれ神以外の何ものかにそのものを神として求めるならば、その人は叡知とコーランの判断に基づいて多神教徒ということになる。もしもある者が他の何ものかに世界の神がそのものに能力を恵み、かつその者が神を必要とする僕であり、実践においても独立していないとしたうえである事柄を求めるのであれば、これは神的行為でもなければ、そういう願いごとをすることが多神崇拜でもない。

[この主題についてのコーランの言葉による証明]

いかなる名目によるにせよ、常識を越えたことを誰かに求めることは絶対多神崇拜であると多分いえるであろう。このような考えに対する答えとして、これに対する論証は意味がなく、理性はそういう考えと反対の判断を下し、また筋の通らない、無謀な否定以外に彼等には証明法がないということに加え、コーランの言葉が我々の主張をはっきりと証明してくれている。

蟻の章（二十七章の三十八 — 四十）

三十八、「これ近侍の者、お前たちのうちの誰か、向こうが降参してくる前に、彼女の玉座をわしのところへ持ってくる者はおらぬか。」と。

三十九、すると精霊国に属する一妖精、「あなたが御座から立ち上がられる前に、私が取って参りましょう。それしきのこと私にはいとたやすい御用でございます」と申し出た。

四十、すると啓典の知識をそなえた者が申し出て、「私は、貴方の視線が戻ってこないうちに取って参りましょう。」と言った。さて、その玉座が御前にどっと置かれると、「ああ、これこそ神様のお恵みじゃ…」と彼（ソロモン）が言った。

すなわち、スライマーン（ソロモン）がこの一座の中でお前たちのうちの誰かがビルキースの玉座を彼女の方から降参し、やってくる前に持ってくる者があるかという、ジンの仲間のイフリートの一人が陛下が玉座からお立ちになる前に彼女の玉座を持って参りましょうと言った。そして、スライマーンが自分の目前に玉座が置かれたのを見ると、「これこそ我が神の恵みなり」と言った、という意味である。

さて、読者に訊ねたいことは、まばたきする前にビルキースの玉座をいく日もの長い旅程を越えて持ってくるということは異常なことであるのか、それとも普通のことであるのかということである。もしもそれが異常なことであり、いわゆる神的な業であるとするならば、スライマーンという、神の言葉によれば預言者であり、神が嘉し給いし人が、この超常的行為を自らのかたわらにいたものの一人に、三十八節によると頼んだことになる。しかもこれは偉大な預言者がイフリート達やその他の者達に頼んだ願いごとである。そして、アーサフ・バルヒヤー（ソロモン大王の大臣の一人とされる賢者）がこの願いを聞き入れたということである。さて、ところでスライマーンを多神教者

とみなし、かくのごとき多神崇拜者を預言者に選んだことを批難し、神はまちがっているとみなすべきなのか、それとも、このような異常な事柄を多神崇拜とはみなさず、一握りの出鱈目な嘘つきのいうことを無意味なものともみなすべきなのであろうか？

〔神の言葉によるもう一つの証明〕

世界の神は、コーランの中でマルヤムの子イーサーの不思議な物語をそれにふさわしい榮譽と明らかな称賛をこめて伝えている。そして人間の能力を超えた行為を彼に結びつけて認めている。ここでは悪人どもにのがれる術がなくなるようにするため、それらのうちの一例を引いておこう。

イムラーン一家の章（三章の四十八節・カイロ版コーランでは四十三）

「そして神はその子に聖典と聖智と律法と福音とをお教えになり、イスラエルの子らのもとに使徒としてお遣わしになるであろうぞ。『さあ、わたしはこうしてお前たちのところへ主のお徴を持ってやって来た。お前たちの目の前で泥の鳥の形を作り、それに息を吹き込めばアッラーのお許しで忽ちそれは一羽の鳥となろう。それからわたしは盲者や癩患者を癒し、またアッラーのお許しがあれば死者を蘇らせましょう。お前らがどんな物を食べているか、またどんなものを貯めこんでいるかも言い当ててみせよう。』

すなわちイエスは、「私はお前たちの神の方から徴とともにやって来た。お前たちのために、土に鳥の形をつくり与えれば神が許せば鳥になる。神が許せば生れながらの盲人も癩患者も癒してやろう。死者を蘇らせてやろう。お前たちが食べているものも家の中に貯めこんだ財産も言いあててやろう。」と言ったのである。

イエスの言ったこれらのことは超常的行為であり、彼等のいう神的な行為である。イスラエルの民が彼に求めたことは多神崇拝的で不信の行為である。そうしてみると、このようなことを言ったことにより、イエスを神を名乗る者とみなし、不信へ呼びかける者とみなすべきなのか。そして病の治癒を求めたイスラエルの民と多神崇拝を宣伝するような人物を預言者に選んだ神を誤っているとみなすべきなのか。もしもそうだとすればナジュドの砂漠に住む一握りの野蛮な無教養の連中の言うことが正しいことになるだろう。

この問題について、コーランの言葉から別な証明を引くことができるが、それらについては触れないでおく。

〔死者に願いごとするのは多神崇拝ではないのか??〕

死者に願いごとをするのは多神崇拝であり預言者もイマームも死んでしまえば鉉物にすぎないもので、彼等から益も害も出てこないといわれるかもしれない。

このような考えに対して、以下のように答えよう。まず第一に、多神崇拝とか不信ということの意味が自家薬籠中のものとされていないから、何でも願いごとをするとそういう考えに照らせば多神崇拝と呼ぶことになってしまうのである。多神崇拝とは神以外のものにそれが神であるとした上であることを願うことであり、それ以外の場合であれば多神崇拝ではないということが明らかになった以上、死んでいるとか生きているとかいうことはこの場合変わりはないのである。たとえ土や土くれに誰かが願いごとをしたからといって、いかにその者が無意味な行為をしたにしても、多神崇拝者とはならない。第二にわれわれは神が能力を恵みたまうた預言者やイマーム達の神聖な靈魂に助力を求めることがあるわけだが形而上学における究極的な論証や確実な理性的証明によれば靈魂は身体からの解放ののち、すなわち死と呼ばれ

ることののちに存続しているということは確かなこととして定立されているのであり、死後において完成した靈魂のこの世界への関与は、より一層深いものであり、哲学者達は靈魂の消滅ということを不合理であるとみなしている。

この問題は哲学者が出現して以来、イスラーム以前および以後の学者や偉大な哲学者達の間で証明されたところの哲学上承認された問題の一つである。またユダヤ教徒、キリスト教徒、イスラーム教徒のすべての民がこの問題を自らの宗教の明白でかつ必然的事実とみなしている。さらに靈魂とその能力の存続はヨーロッパの形而上学者達の間でも当然で自明のこととなっている。この小冊子では、書けば一冊の本にもなってしまうようなこのような長い検討を要する問題を考究する余裕はないので、いく人かの信頼できる大哲学者の見解を述べることで足りるとすることにしよう。しかし、自らを議論好きと認めている者は問題の全容を知るためにそういう人々の書物を参照すればよい。

〔イスラーム以前の哲学者達の見解〕

ミレトスのターレス

イスラーム以前の哲学者達のうちで、古代の哲学者の多くは謎めいた言葉を言っており、後世の人々はその解決のために努力しているとはいえ、彼等の多くの言葉の中に靈魂の存続とそれの必然的結論であるところの靈魂の非物質性（靈性）がはっきりと述べられている。七賢人の一人ですぐれた哲学者であったミレトスのターレスは、神はあらゆる存在者ならびに可知的对象の形相がその中にあるところの元素を作り出したと主張し、さらにこの元素は一個の澄明体（safw）と一個の混濁体（kadr）とを持つという。元素の澄明体から発生してきたものが物体（jism）である。また、その元素の混濁体から発生したものが物質（jirm）である。物質は可滅的で、物体は可滅的では

ない。物質は不浄で表相的 (zāhir) である。物体は精妙で内相的 (bātin) である。しかし、第二の生成レベル (nash'at-e dīgar) において物体は表相的となり、物質は消滅する。物体についてターレスが用いる描写から、物体の語で意味されるものはそれが内相的で精妙で永続するものであることが明白である。物体とは浄霊界 (ālam-e barzakh) もしくは英知界 (ālam-e uqūl) におけるイデア的なものである。またターレスは靈魂が靈魂の属するものとは別な次元の世界を希求するとみなし、靈魂は第二の生成レベルにおいて永続するとしている。

ミレトスの哲学者アメクシメネス

この大哲学者の謎めいた言葉の中にも靈魂の永続についての明白な証言がある。彼は邪悪な靈魂に対してさえ永続性を主張している。彼はあらゆる生存現象は英知界に由来するという。そして、この場合の永続性はその生存現象の中にある英知的光明の量に準ずるとする。そして、この世に生ずる消滅現象は、生存現象のもつ重く最下等の部分に由来するという。というのも、生存現象には幾重にもとりまく殻状の諸部分があるという。そして、これらの殻は取り去られるという。彼はこの物質世界にはあまたの不浄物があり、それに執着するものは天上界に達することはなく、(他方)それを放下する者は上昇 — 非常に精妙な世界に到達し、その喜びは永続的であると主張する。

大哲学者エンペドクレス

この大哲学者は預言者ダビデの時代に生きた。そして彼は叡知をダビデと賢者ルクマーンから学んだ。彼の思想はこれまでに記した者達のものよりはるかに明白である。彼は全ての相違対立は物質界に由来するとみなす。また調和と愛は靈的存在に由来するとみなしている。彼はすべて下位の靈は上位

の霊にとっての殻となるという。すなわち植物霊は動物霊の殻なのである。また動物霊は理性的霊（人間靈魂）の殻であり、後者は理性の殻であるという。理性は靈魂の最良部を通じて本来の自らが属する世界に回帰する。個別的靈魂は普遍的靈魂の諸部分であり、個々の靈魂は天上界から来たって、またそこへ回帰するという。

賢者ピタゴラス

この哲学者はスライマーンの時代に生きた。そして叡知をスライマーンから学んだ。彼の思想はすべて暗喩で表わされている。その神秘的思想を数学的形式で打ち立てている。彼は人間は本来、諸々の宇宙のすべてに対応しているとする。すなわち人間は小宇宙で宇宙は大人間であるという。靈魂は身体と結合する前に基本数の連結に基づいて創られている。したがって、靈魂がその性向を本性の持つ秩序に基づいて浄化し、外部との交渉から分離独立を達成すれば、その本来属すべき世界に結合し、それまでの姿より一層美しく完全な姿となって見えざる諸世界の一員となるという。ハルニコースとザニコーンはいくつかの問題を除いてはピタゴラスの説を奉ずる哲学者である。彼等は靈魂が清く、あらゆる種類の不浄から浄められていれば天上界、すなわちそれにふさわしい住地に行くことを主張した。

大哲学者ソクラテス

偉大なる哲学者ソクラテスは叡知をピタゴラスおよびアリスラードゥスに学んだ。彼はその叡知と術により神学と倫理学に手を染め、禁欲と靈魂の節制と人格の浄化にいそしんだ。さらに、現世に背を向け山中や洞窟に隠棲した。そして人々に偶像崇拜と多神崇拜を禁じ神を信ずるよう勧めたため人はスルターンに彼を処刑せねばならぬようにした。そして周知のとおり人

人は彼に毒を飲ませた。彼は神学、自然学、形而上学の分野において確実で
良き思想を持っている。

ソクラテスは人間霊魂について、それが身体と結合する以前からある種の
存在様式で存在しており、霊魂が身体と結合するのは霊魂の完成のためなの
であると言っている。身体は霊魂にとっての入れ物で道具なのである。した
がって身体が亡んでしまえば霊魂は自らが属すべき普遍的世界へ回帰すると
いっている。ソクラテスは彼を処刑した王に対し、ソクラテスは樽の中にい
る、王は樽を壊す力しか持っていない。樽を壊わしても、水は海に帰ってい
く、と言った（と言われている。）

偉大なる哲学者聖プラトン

この大哲学者は神智学の巨匠の一人で、タウヒード（唯一神信仰）とグノ
ーシス（ヒクマ）の説によって著名である。彼はダリウス三世の子アルダシ
ールの世に生れた。ソクラテスのもとで叡知を学んだ。ソクラテスが毒殺さ
れ死ぬと、その後継者となった。彼の師の一人にティコイオスがいる。彼は
神学の分野でしっかりと確立した思想を持っており、照明学派の賢者シハー
ブ・アッディーン・スフラワルディーヤイスラームの著名な哲学者「神知学者
の長」モッター・サドラーは彼の説のある部分を論証の根拠としている。たとえ
ば、プラトンの形相や離存形相の説がそれである。この哲学者の説によれば、
霊魂は（この世界とは）別な世界にいたもので、その本来の世界に楽しむも
のであった。かの世界にあるところのものは喜びや愉しさにかかわるもので
あった。霊魂はかの世界からこの世界に下り来たり、霊魂の本質のうちに存
在していなかった個別的な存在物を四肢を通じて利用し、その結果、霊魂が
（もっていた）翼が剝落してしまった。そして、霊魂はこの世界で（また）
翼を獲得すれば自己本来の世界へ飛翔してゆくだろう、という。

大哲学者アリストテレス

ニコマコスの子アリストテレスはスタゲイラの人で、世界の最大の哲学者の一人とみなされている。諸学の基礎である論理学の諸説の基礎を築いたという理由で、彼は第一の師 (mu'allim awwal) という名で知られている。

「時代の驚異」イブン・スィーナーはこの偉大な人物の学説の前には深く敬意を表した。イブン・スィーナーの言葉によれば「アリストテレスがたてた論理学の規則に誰一人として異論をはさむことのできるものはいなかった、また彼の強固な思想は破壊されたり改竄されたりしたことはなかった」のである。

フランスのデカルトは自らの考えで、またわが国の尊敬すべきある著述家達は論理学に革命をおこしたとはいえ、学問を志してこの分野に手を染めた者なら誰でも、この分野と形而上学に関するデカルトの学的根拠がいかに脆弱で子供じみたものであるかを知っている。残念なことに、われわれはヨーロッパ人を恐れるあまり、全く自分を見失なってしまうている。そして、我我自身が(すでに)高度の専門知識をもっているようなもので、しかもヨーロッパ人は千年たってもそれに追いつけないような学問をたやすく受け入れてしまうのである。「治癒の書」の論理学、「東方照明学」、モッラー・サドラーの「最高叡知学」をもっているものが、教育計画にも組み込まれているヨーロッパの論理学や哲学をなぜ必要とするのか?あの連中は、自然学の分野である国が進歩を遂げていれば、神智学の分野でも進んでいると思込んでいるのである。これは、大変な間違いなのである。イスラーム東方世界の著述家達の犯した犯罪の一つとみなさねばならない。

靈魂の永続性についてアリストテレスは次のように言っている。すなわち人間靈魂は知識と実践の能力において完成した者となったあかつきには、神的な徴となり、神と似たものとなる。そして自らの完成因と結びつく。このような神との近似性は靈魂の能力、あるいは資質、あるいは努力に応じて達成されるという。そして靈魂は身体から分離すると、靈的存在や神に近い天

使と結びつき、靈魂にとって快樂や歎びが完成する、という。しかし、劣悪な靈魂についてはこれと反対のことを言っている。

ここでは、他にもアレキサンドロスなどのような賢者や哲学者がいるが彼等について述べる必要はないと思う。そこで次に、イスラームの哲学者の中のある者達の説を述べることにしよう。

周知のとおり、イスラーム教徒はみんな、哲学者もその外の者も死後に人間靈が存続するとみなしていて、人間靈に崩壊や消滅が起るとは言っていない。しかし、筆者はイスラーム哲学者のうち数人の偉大な人達の名称を参考のためにあげておこう。

〔イスラーム哲学者の説〕

大哲学者シャイフッ=ライース(イブン・スィーナ)

シャイフッ=ライース・アブー・アリー・フサイン・ブン・アブドッラー・イブン・スィーナはボハーラーの人である。彼の父はバルフの人であった。彼の生涯とその学業と著作の態度は理性を驚かせる不思議に満ちている。伝えるところでは、「医学典範」を十六歳で書いている。そして、彼は「二十四歳になった時には世界中に自分の知らない知識はないと思った。」と言ったのである。「治癒の書」の形而上学と自然学の部分は一日五十枚のペースで全く参考書なしで書きあげたといわれている。その著作が学問における地位を確立したこの大哲学者は、身体の崩壊によっては靈魂が崩壊しないこと、および靈魂の崩壊はありえないということについて、その大部分の書物の中で述べて、論理的にも証明している。「指示と警告の書」の中でも、これと同様なことを述べている。すなわち、理性の対象となる諸形相の基本である理性的靈魂は何らかの肉体の中において存立したり刻印されたりしているのではない。むしろ肉体は靈魂の道具なのである。したがって、たとえ死によっ

て肉体が靈魂の道具となることが不可能となっても、靈魂の状態には何の害もない。むしろ、靈魂は永続的要素を利用しながら存続しつづけるという。また彼は、理性靈魂が肉体を利用していたからといって道具がないということが能動理性と結びつこうとする靈魂の性向をそこなうことはないといっている。なぜなら、靈魂は自己の本質について理性を働かせているのであって、道具について理性を働かせているのではないからであるという。彼は別の書物の中でもまた、このようなことを述べて、この主張に対する論証を行なっている。

東方照明学の大賢者シャイフ・シハーブッ=ディーン

シハーブッ=ディーン・スフラワルディーとして知られている殉教の師アブル=ファトゥーフ・ヤヒヤー・ブン・ハバシは貴重な書物とすぐれた作品の著者であり、プラトンの叡知とその学派の復活者である。彼の著作のうち、「東方照明哲学」(hikmat al-ishrāq)は照明学派の直知的哲学における彼の優位を不動のものとしている。さらにまた、彼は孤独と質朴と肉体的清浄の資質に恵まれている。

この照明学派の賢者は死後の靈魂の状態とその諸段階について非常に詳しく研究している。そして各々の段階について、その状態を定めている。そして、完成した諸靈魂あるいは主長的光(anwār espahbadīyāh)すなわち純粹靈魂について、それらに純粹な光の世界と結合しようとする性向があらわれ、その身体が消滅すると、それらは生命の源に赴き、この世界から解放され、純粹かつ聖なる光の世界に行くと言っている。彼はこの分野についてさらに詳しい分析を行なっている。さらに、中間的存在者についても語っている。中間的存在者のうちの祝福された人々や禁欲生活を営む人々は(この世界から)解放され離存形相の世界に行くと言っている。

イスラームの著名な哲学者神智学者の長（モッラー・サドラー）

ムハンマド・ブン・イブラーヒーム・シーラーズィーは最大の神智哲学者の一人で神智学の規則をうち据えた人であり、かつ形而上的叡知を再興した人である。彼は創造と復活の説を不滅の一大原理に基づいてうちたてた最初の人物であり、肉体的復活の説を合理的論証により確立し、形而上学上のイブン・スィーナの説の欠陥を明らかにし神聖法と神智学とを結合させた。十分に調べれば、モッラー・サドラーについて何か文句を言っている者は、自らの欠陥やモッラー・サドラーの高級な思想内容を理解していないことによることがわかる。非常に多岐にわたる論拠によって立論している思想を悪意をもって研究することが当然、宗教や哲学の大思想家の誤解の原因となり、そのためモッラー・サドラーがアシュアリー派やムウタズィラ派にむけた風刺の言葉を、彼の真理を知らないために宗教や宗教指導者達に対する攻撃と考えてしまうのである。

この偉大な哲学者は靈魂の存続と死後の状態について長い説明をしており、それについては彼の著作を参照しなければならない。モッラー・サドラーは靈的復活と肉体的復活の双方を主張している。靈的復活について、彼は人間靈魂が完成し能力を得て、身体の結びつきが終止し、自らの究極的本質にたち帰りその始源に回帰すると、不可説な、あるいは可感的歓喜とは比べようもない喜びと幸福が生じるという。

さらに同じ所で彼は、物質的存在は死やあいまいさや別離や消失を伴なう。さらに物質との結びつきが強ければ強いほどに、ものはその存在意識や知覚が不完全であり、加えてわれわれの知覚は自己を身体からの分離の際に、より強く把えるという。多くの人々は、物質的身体とその変遷の中に埋没することにより自己を忘却し、自らの本性を自覚することがない。以上がイスラームの哲学者達の説である。ところで、ヨーロッパの哲学者の学説は多くの読書子の間では重要なものとみなされているから、彼等の説のあるものを簡

単に述べておくことにする。

〔フランスの哲学者デカルトの説〕

ヨーロッパの観念論哲学者は、デカルト以前の数世紀前から哲学者達の第一主題として心理学に意を用いた。ところでギリシャの哲学者達は論証によって靈魂の不滅と永続を証明したが、彼等は今日まで感覺的経験と可感的超常現象によって靈魂の永続と超常現象によって靈魂の永続と超越的能力を確実に感知しうるものとみなしている。デカルトは理性的靈魂のみを認めている。そして靈魂と物体の結合の様態について考究し、靈魂の最大の特長を思惟とし、物体の最大の特長を延長とした。そして、この二つを全く区別されるものとみなした。

彼の主張では、靈魂と物体とは別々のものであるため、したがって靈魂が物体に現存においても生成においても依存しているとは考えていない。それゆえ、物体は消滅し靈魂は永続するという。デカルトの理性靈魂と身体の（直接）結合については反対し、媒介者を措定しているがデカルトの信奉者達は沢山いる。デカルトはヨーロッパ哲学において高い地位を占めているとはいえ、靈魂の永続の問題についてはこれを空想的思考の領域から実存的真実の領域に移していないといわれている。その結果現代の観念論者は靈魂の存在、靈魂の物体との分離および死後における靈魂の永続性を降霊学によって証明している。今ではヨーロッパやアメリカにおいてはこの説が承認されていて、唯物主義者達でさえ観念論者となり、靈魂の永続説の忠実な信奉者となっている。そして靈魂に関する奇妙な定理が認められ流布されていて、彼等の偉大な学者達によって語られている。

アラビア語百科辞典（ダーイラト＝ル＝マア＝リフ）の著者ファリード・ワジュディーは彼自身も催眠術と降霊術の信奉者である。彼はイギリス、フランス、アメリカ、ドイツ、イタリアの学者の中から、この超常的な話を信

じている四十七名の名前をあげている。彼等は学問研究の上ではこのことを支持したり信奉したりしてはいなかったと言っている。さもなくば信奉者の数は数千人になるであろう。これらの人々の語る奇妙な物語を見たいと思う者は、これについて書かれた書物を参照し、ヨーロッパの哲学者が述べた諸学説を見れば靈魂の生存を信ずるようになるであろう。以上、ギリシアおよびギリシア以外またイスラームおよびイスラーム以外の古代・近代の哲学者達の説の摘要である。

〔靈魂の生存に関するコーランの証明〕

死後靈魂が生存するということはあらゆる宗教者、知者、哲学者、さらに靈魂転生説の信奉者にとって自明のことであるが、ここではこの問題を明らかにし疑問点が残らないようにするためコーランから証明を引いておこう。

群なす人々（三十九章）四十三節

「人が死ぬ時、その魂はみなアッラーのみもとに召されて行く。まだ死なぬ場合も眠っている間（アッラーのみもとに行く）。死の宣告を受けた（魂）はそのまま引き止め、その他のものは定めの時までまた還しておやりなさる。さ、これこそ、れっきとした神兆ではないか、物事をよく反省する人々の目から見れば。」

すなわち、神は死と眠りの時に靈魂をとる者なのである。そして死が定められた者たちの靈魂を保管し、他の者の靈魂はその者達の死が決められている時までには送り返す。すべての死者の靈魂を特別な世界に神は保管している、ということである。

信仰者（二十三章）百一節

「だが、さすがの彼ら（無信仰者）もいよいよ死に臨む段になると、『主よ、私をもう一度還らせて下さいませ（一〇二）。今までは放って参りましたが、今度はきつと行ないを改めます』などと言う。なんのどうせ口先だけの出任せであろう。また換ひ

起されるその日まで、後ろには障壁が立ちふさがっている。」

すなわち、死が訪れた時、彼等の一人は、「神よ私を現世に還して下さい。きっと善い行ないをいたします。」と言うが、彼は決してそんなことはしない。それは言葉をいっている。彼等の後ろには復活の日まで、障害が立ち塞がっている、ということである。

牝牛（二章）百四十九節

「アッラーの路にたおれた人々のことを死人などと言ってはならぬ。否、彼らは生きている。ただ汝らにはそれがわからないだけのこと。」

イムラーン一家（三章）

「アッラーの御ために殺された人たちを決して死んだものと思ってはならないぞ。彼らは立派に神様のお傍で生きておる、何でも十分に載いて。」

すなわち、神の道に死んだ者達は死者であると思ってはならない。むしろ彼等は生ける者であり、神のみもとで糧を得ている、ということである。

信者（四十章）四十八節

「だが、フィルアウンの一族は、恐しい天罰に遁げ道もないように取り囲まれてしまった（四十九節）。すなわち、地獄の火のこと。朝な夕な、その火に炙られる。いよいよ審判の時が来ると、「さあ、フィルアウンの一族を一番ひどい責苦の中に投げ込め。」

すなわち、フィルアウンの一族には最悪の業罰が下され、彼等は朝な夕な火で炙られ、復活の日が一番厳しい責苦の中にほうり込め、ということである。

調べられる女(六十章)十三節

「彼等は来世というものがどうしても信じられない。無信仰者が墓穴に眠る人々の復活をどうしても信じられないのと同じように。」

すなわち、墓場に眠る人々の復活を絶望することは不信者の仲間とみなしているのである。

[これまでの内容についての読者の判断]

ベルジャ語を解する尊敬すべき読者や開明的な青年諸子のうちで探究し創造するヨーロッパの哲学者達の現代の精神上的諸発見について知識を有する者、また催眠術上の新説の信奉者達やイスラーム以前および以後の幾世紀も間の偉大な哲学者達の説に通じている者、そして諸民族と諸宗教の歴史や過去の時代や現在の世界の宗教者の主張を知っている学者達に判断してもらいたいことは、われわれが数千人の偉大な学者や哲学者の学説や彼等の理性と感覚に基づく絶対的な証明を捨て、預言者達やその信奉者という数百万人の宗教者の主張を踏みにじり、明晰な言葉で靈魂の永生を宣言しているコーランの聖句を拒否し、一握りのナジュドの犯罪者および自らの知力も理性もなくし人倫をわきまえず、何をしているのかも解らないあわれなイラン人達が盲従しているイブン・タイミーヤとムハンマド・ブン・アブド=ル=ワッハブの主張を受け入れるべきなのか、あるいはイブン・タイミーヤおよび学問の世界では世の中でも最もくだらない連中であるところの彼につき従う幾人かの無軌道な者どもを学問と知識と宗教の道に迷いそむいているとみなし、市民としての権利も宗教上の権利も否認すべきなのかということである。

〔宗教への寄与？〕

この連中は、「もしも我々が正しく宗教に寄与しようとするならば、まずこの千年に及ぶ嘘やゴミの堆積を取り除いて道筋を明らかにするより方法はない。」といている。

これまでに嘘つきで民衆を欺く裏切り者が誰であるのかがよく明らかにされた。宗教への寄与ということでこの有毒な血にまみれた文筆家が意味していることは、「我々は、世界のあらゆる時代の哲学者達の絶対的な判断によっても、またコーランの明晰な言葉によっても永遠に生きて、神のみもとで御恵みと慈愛のうちにあり、神が完璧な権威とともに、記憶にとどめている何億という数の宗教と神の法への貢献者も宗教的指導者も神の道に献身する人々も殉教者達をも無機物で腐朽してしまったものとみなし、そういう人々に対し重きを置かず卑少なものととして振舞い、忘却のヴェールの後ろにうち捨てて、社会に貢献しようとする人々の自己犠牲精神の気概や勇気を窒息させてしまい、存在と個人および社会生活にあてはまるコーランの明らかな言葉についての信仰を千年のゴミの堆積とみなしそれを嘘偽のかたまりと解釈しよう、そうすれば、宗教と神の法に寄与することになるであろう。」ということなのである。ああ！人として生れた者が何という愚かしいことをいうのであろうか！

第三章 宗教者

設問の五。 すなわち、ムジュタヒド（イスラームの教学に通じ、イスラーム法の研究実施にたづさわる人）が、イマームの隠れの時代においては、イマームの代理人であるといわれていることは本当のことであるか否か、もし本当とすれば、ムジュタヒドの能力の領域はどの程度なのか？ はたして、ムジュタヒドには、行政権と統治権とがあるのか、否か？ というものである。

〔行政権 (Hukūmat) と統治権 (wilāyat) についての概観〕

ここでは、三章、四章、五章、および設問の五から九までに対する答のための前提を述べておく。読者は、その主旨を理解するために、ただしく主題を把握し、考究してもらいたい。

習慣とか、ある一つの行為を反復することは、たとえばある人が習慣に反することをいうと非常に驚かれ、それが逆の意味にとられたりすることがあるように、しばしば、理性の判断におおいをかけてしまうことがある。

であるから、ここではやむなく一つの例でもって問題を明らかにしなければならない。

さて、一人の普通の人間が、君から力づくで十リヤルとりあげるか、あるいは君を君の意図しない作業に無理強いしてつかせたとすれば、すべての人がそういう人間を悪人で悖徳者であるとみなすであろう。そして、彼のしたことを理性の規準から外れているとみなし、彼を罪人とみなし、彼に罰を与

えるように主張するであろう。

ところで、その同じ人間が徒党を組み、自分のまわりに二、三十人の人間を集め、ある村を襲撃し、幾人もの人を傷つけ、村を劫掠したとすれば、これまた、すべての知性を有する者が、その者を抑圧者とみなし、彼の行為を罪悪とみなし、彼を追放し懲罰することが必要であるとみなすであろう。

さらに程度がすすんで、この人間の徒党が強力になり、ある都市を攻撃し、幾人もの住民を殺傷し、その都市を劫掠し、民衆から上納金をとりあげたしたら、これまた、すべての賢者が、彼を抑圧者で犯罪者であるとみなし、彼の懲罰と死刑を妥当と考えるであろう。

これよりもまた、もう一步程度が進んで、この犯罪者が数連隊の兵士をひきつれ、ある国の首都を攻撃し、そこにいた人々を捕え、幽閉し、多くの人々を殺害し、その首都を劫掠し、その国の王を追放し、自らが王の地位についた場合は、数日間はこの仕うちも記憶にあたらしく、人々も悲しんでいるが、やがてはこの攻撃も殺戮もわすれられ、彼のために祝典をとりおこない、照明燈を飾りつけ、彼を皇帝陛下と呼び、彼の命令を神の命令と同一視し、国歌の中に彼をうたいこむまでになってしまう。丁度、「神の命令にも、王の命令にも」という歌の文句のように。

このようなレベルの違いについて、習慣から解放された理性に問いかけるならば、どういうことになるであろうか？

不正のおよぶ範囲がいかに小さくとも、不法な犯罪者や罪人や犯罪行為は識別された。しかし、不正のおよぶ範囲が拡大すると、殺人やその他の重罪をとともなっている、あらゆる呼称が変わってしまう。彼処では盗人、罪人、犯罪行為と呼ばれたものが、ここでは至聖浄福の皇帝陛下とか、神の意志と神の定めによる勅命とか、そういったものになっている。

ここで、この世の法規についても一瞥してみよう。

ある普通の人物が一冊の小冊子を書き、その中である都市や国家の民衆に

対し、年間しかじかの金額の賦課金を支払わねばならないとか、（民衆の）生活様式や意図に反するしかじかの仕事をしなければならぬ、というような強制義務を書いたとする。（その場合）われわれは、この小冊子全体を、悪質文書の一つとみなすのである。もしも、その著者が、自分の定めた規則を然るべき時期に実施しようとするならば、われわれは彼を犯罪者とみなし、彼の定めた規則を、理性と正義に反するとみなすであろう。たとえ百人もの人間がこの様な種類の本を書いたとしても、われわれは同様に判断するであろう。

しかしながら、その同一人物が、力づくもしくは金づくで違法な票をあつめ、代議士となったとする、あるいはまた、かの百人の人間が、われわれが知りつくしている手口で自らを代議士の席につけたとする。こういう場合には、もはや彼等がおこなうあらゆる裁決が選挙民の意向に反したものとなり、あるいは選挙民の財を奪いとったり、良い慣習を冒瀆したり尊厳を傷つけたりするものとなっても、そのような裁決が賢明なるもので、かつ正義に準拠していて、それに反対することが違法で犯罪だということになる。

愚劣な習慣から解放された澄明な理性にこれらの者共の相違について訊ねてみるとよい。

もしも、君が民衆自らが代議士を決めたのであるから、服従しなければならない、というのであるならば、次のようにいわねばならない。すなわち、第一に、多くの人々は、代議士の職能や選挙期間の開始と終了、代議士制のありかた、代議士制度、代議士の権限について知識をもっていないのである。こういう理由で、二十万人以上の人口のある町において、一万もしくは一万二千より多くは投票証が配布されていない。このような場合には、代議士制は不当であり、彼等の決議は圧政であり、人民に対し実行されるべきでないということをもみんなが知っている、いおう。第二に、十四回の選挙をわれわれのイランは経験しているが、専制体制以前にせよ、あの苦悩の時代にせよ、またこれに続く時代にせよ、代議士制が正義と自由にもとづいて実施さ

れたことがなかったことは、みんなが知っているのである。ところで、これらすべての時期を見すごすことができたとしても、パフラヴィー朝の時期は隠しおおせない時期である。そういう時期の諸法規を実施することは、最大の罪であり、不正であるにもかかわらず、それらの全てを公正であるなどともみなすことがどうしてできようか？

第三に、代議士は、理性に即して自らの仕事を選挙民の公益と一致させねばならないのである。さもなければ、背信、犯罪として代議士職から追放されるのである。選挙民は決して自らの生命、財産、子供、尊厳を彼等に委譲したのではないし、委譲することもないのである。こうしてみると、あらゆる人定法と世界の政府は、その根拠が不正に基づき、かつ理性的判断に反して立てられていることがわかる。

〔政府の必要性〕

なん人も否定しえない理性の明白な判断として、人類の間には法と政府が必要であり、人類という一族には組織、規則、統治体制 (*wilāyat*)、基礎的行政体 (*Hukūmat-hā-ye asāsī*) が必要であるということが存する。神の賜いし理性の判断する所では、人民がそれに従い服従することが理性の判断に即し必要であるような政府を設立することは、人民のすべてのものの所有者であるような者、すなわちあらゆる人民の所有物に対する占有権の行使が、自らの財に対する占有権の行使であるような者にとって許されふさわしいことなのである。このように、人類全体に対する占有権と統治権の行使が、理性に即して妥当で正しいような者は、すべての存在者の所有者で、かつ天と地の創造者である神なのである。したがって、神はいかなる規則を実行したとしても、自らの領国において実行しているのであり、いかなる占有権を行使したとしても、自らが与えた物に対して行使しているのである。もしも神が、ある者に統治権を与え、その者の裁定に対し、預言者の証言にも

とづき服従の必要性を認めたのであれば、人類がそれに服従することは当然のことである。神の裁定以外のものは、神が人類に受けとってはならないと決めたところのものであり、受けとる理由もないのである。法規の設定者も、人間であれば、自らも同様に、欲望、怒り、魔性や悪だくみを持つ。彼等は自らの利己的利益を求め、他人の利益を犠牲にする。要するに、彼等も多くのことがらを必要とし、囚われているのである。この様な人物に、誰もその立法が大衆の利益となるなどと期待しはしない、また、自分を他人に優先させることはないなどと期待してはいない。さらに加うるに、彼等は法を設定しているが、他の人々と同じく、あらゆる分野および特殊の事項に通暁しているのではない。また、失敗、過失を犯さぬという保証もない。彼は、なんとしばしば人民に有害で、国の利益に反する決定をしていることであろうか！もしも、そのような一連の諸法規を白日の下にさらそうとするならば、一冊の書物にしなければならない。われわれも、今は暴露行為を必要とは思わない。現行の法規を一度でよいから改めるか、もしくは調整し、彼等自身の過ちを自ら理解すれば充分なのである。彼等自身にも解っていないような過ちが、その中には非常に多く存在しているのである。懲罰と公民権の法規の中だけでも非常に多くの反理性的なものがあるので、一度にそれを列挙するのはむずかしい。読者は現行の法運用がどれ程子供じみて下らないかを見るがよい。時として無能で無知な一人の男に完全な自由裁量権が与えられ、その男が(真の)主のいないこの国のあわれな人民の生命・財産に対し思うがままのふるまいをしている。アメリカ人のアドバイザーの名前が、ある人物の上につけ加えられるやいなや、これらの愚かで石頭の政治家達は、その人物に対してもはや過失、失敗、もしくは背信、盗みということを申し立てない。これら利己主義の圧政者達は、神と宗教の辞書からとり出され、同時にもっとも良い方法と美しさでわれわれの文化に無限の広がりを与えたアラビア語を、彼等の言い分では外来語であるという罪名で国外追放しようとしている。しかも、一国の運営権を一握りの外人に手渡しておき、そうすることを全く厚顔無恥

にも一歩前進とみなしている。こういうことを愚行もしくは背信行為といわずしてなんと呼ぶことができようか？

〔この提言に対するコーランからの証明〕

だれでもこの提言を正しく見つけ、それについて思索するなら、これを承認するであろうし、また、人類がいかに強力でかつ能力と権力を持つものであるとはいえ、理性は人類が法制定する権利を認めないし、そういう法を理由もなく承認することはないし、人類の法治権と統治権を、不当で非理性的なものともみならずではあるが、ここに筆者は神の証言を引用し、この法制定と統治権の様相を明らかにしよう。コーランの証言とは、食卓の章四十八節以下である。

「四十八。アッラーが下したのものによって裁判しないものは、不信者である。四十九。アッラーが下したのものによって裁きをしないものは、不義のやからである。五十。アッラーが下したのものによって裁きをしないものは、邪悪な連中である。五十二。われは真理により、汝らに啓典を下し、それは、先立つ啓示の書を確認とし守るため。されば汝らは、彼らの間を裁くにあたっても、必ずアッラーが啓示したものに依拠しおこなえ。彼等の思惑に乗せられ、真理に背くようなことがあってはならない。五十四。アッラーの下したものに依って彼等の間を裁き、彼等の思惑に決して乗ってはならない。アッラーが下されたもののどこからも離れたりせぬよう警戒せよ。五十五。彼らはジャーヒリーヤの裁きを欲しているというのか？ アッラーにまさる裁き手がいるというのか？」

一般的に、裁定権を神に個有のものとしているコーランの章句とか、また特に個々の法令を神の側から下された法令に組み込んでいるような箇所を数えあげようとすると、長く広範な話になってしまう。ここではさらに、こうい

うことすべては別の機会にゆずることにした。理性に問うてみたいことは、この世界を、このような驚異的秩序と整合性とともにお知と善にもとづいて創造し、しかも人類というそれぞれが全世界を支配したいという欲望を持ち、どの人も自分自身の食布においてパンを食うこともなく、本能的にどの人も他者を抑圧し侵害しようとしている奇怪な存在そのものを認識している神が、彼等に責務を与えることなく放置するなどということがあり得ようか？ また彼等の間において正義の政府を設立しないということがあり得ようか？当然、そうしないということは理性の判断に照してもあり得ないことであるから、神というそのあらゆる業が理性の確固たる基礎に基づいている者に結びつけて考えるべきではないのである。してみれば、誰々の国において政府を設立し実定法を定めることに自ら責任を負うのである。しかも、人間のつくる法は当然すべてが正義と秩序と主権の維持にもとづいて定められるはずである。勿論、神の天界的諸法の中に、この世界における個人的利益とか私的配慮とか様々の要素が介入することはない、なぜなら神はこういうものすべてから聖別され超越しているのだからである。このような法は、世界の国々の一般的な側面から個人の家族生活の細目にいたるまで、また全人類の社会的生活から洞窟に一人生活している人間の個人的生活にいたるまで、さらに子宮のうちにある精液のようなものから窮屈な墓場に行った後にいたるまでをおおいつくしているのである。過去の数千という法はイスラームという神の宗教に根ざしているのである、「神のもとにおける宗教とはイスラームなり（コーラン三章十七節）」。筆者はこれから明白な論証をもって政府の設立、税法の設定、人権と罰則に関する法の設定、国の秩序に関する法の設定、そして軍の設立から役所の創設のやりかたについてイスラーム法が、いかなるものも見のがしてはいないことを述べるであろう。あなたがたはそういうことを知らないのだ。すべての不幸は、そのような法を持っている国がその手を諸外国にさしのべ、一握りの利己主義者の有毒な思考からにじみ出したそれら諸外国のでっちあげの法を自らの国の中で実施していることである。ま

た、神聖で宗教的国家である自国の法を、この国には法がないとか、その法が欠陥を持つと考えて無視していることである。そして、ただ裁判についてのみ最良の方法でかつ最も簡単な手順で裁判を実行できる数千の条項が宗教の中に存するのみと考えているのである。ここからは、これについて述べて問題を明らかにしたい。

〔以上の論旨の結論〕

なん人も神をのぞいて人に対する行政権を持っていない。また、なん人もまた法設定の権利を持っていない。理性の判断によれば、神は自らの人民のために政府をつくらねばならないし、法を定めねばならない。しかし、法とはすでに措定されたところのかのイスラームの法のことなのである。これから、この法が万人のためのものであり、永遠のものであることを立証する。しかしながら、預言者とイマームの時代の政府は、神がコーランの言葉によってすべての人々にそれに服従することを義務的なものとした者達そのものと共に存在している。われわれは現在彼等の時代と関わりを持っていない。われわれの議論の対象となるところのものは、今の時代なのである。

〔立憲国民会議が政府をつくる〕

問題となっているムジュタヒド(イスラームの教学に通じ、イスラーム法の研究、実施にたづさわる人)の統治権とは最初からムジュタヒド達自らの間で、統治権が根拠を持っているのかいないのかということについて、またその統治権の限界について議論されている。この問題は瑣末な法学者の議論の一つであり、それぞれの立場を採る者達が、論証をしているが、それ等の主たる部分は預言者とイマームから伝えられるハディースである。今ここで、われわれは彼等の主張していることには用がない。なぜなら、この議論は、法学的知識が必要だからであり、

このような小冊子にはふさわしくないものであるからである。さらに加えて、これらの人々もまた、この問題を理解していないのである。ここでは、理性に一つの問いを発すれば、おそらく問題は解決するであろう。当代における行政権と統治権は法学者の手にあると主張するわれわれは、その法学者がジャーとか、大臣とか、軍人とか、清掃人であるとかいっているのではない。むしろ、かくの如く、一つの立憲国民会議が一つの国の構成員により形成され、その会議が一つの政府をつくり、一つの独裁制へと変化を与え、ある人物を独裁支配者に選び出しているのである。また、かくの如くに一つの国民会議が当世に悪評高い一群の人々から構成され、ヨーロッパ製の法規もしくは自分勝手な法規を、そのいかなるものも、ヨーロッパの状態に対応していない国に無理強いしているのである。あなた方のすべては、盲目的にそれを神聖視し、独裁君主を立憲国民会議のとりきめによって君主と認めている。そういうことは世界のいかなる所にも、また国家のいかなる規律にもそぐわない。もしも、この同じ国民会議が、神の裁定についても知っており、また正しき者でもあり、さらに様々の野望から解放され、そして現世の事や現世的権力にかかずらうこともなく、人民の利益と神の裁定の実行以外にはなんの意図もないような宗教心厚いムジュタヒドによって構成され、そして神聖法に違反することなく、かつ圧政と抑圧を慎しみ、人民の財産と生命と尊厳を犯すことなき一人の正義の支配者を選出するのであれば、国家の秩序のいかなる分野にとってもふさわしいものとなる。同じく、国民会議が宗教心の厚い宗教法哲学者により構成されるか、あるいは、憲法も宣言しているとおり、国民会議が宗教学者の監督下におかれるのであれば、それは世界のいかなるところにも、ふさわしいものとなるのである。

立憲国民会議が槍先に強制されて開催されたとはなんたることであろうか。しかも知ってのとおり現在もそこで制定された法が有効、かつ正統性を持っているのである。しかし、もしもこの会議が品行方正な有識者によって構成さ

れ、神聖法に準拠していれば、問題が生じたであろうか？ 彼等国会議員達は神聖法に対立し、ヨーロッパ製の法に追従しようとする者以外の何者でもない。これこそが、われわれの最大の不幸の一つなのであり、理性の判断に反するところのことなのである。ムジュタヒドは、いかなる場合にも、国家の秩序とイスラーム諸国の独立に反対したことはなかったのである。かりに、これらの法が神の命じたところのものに反しているとみなし、政府を正道からそれたものとみなしたにしても、それに反対したことはなかったし、しないのである。なぜなら、この腐敗した体制をも、それがよりましであるとみなしているからである。それゆえに、彼等が決めた統治権と行政権の規約には、教令とか判決とか、幼少者および障害者の財産の保全への関与というようないくつかの条項以上のものはないのであり、その規約の中には、行政権という名称はついで存在せず、また、神の支配権をのぞいてあらゆる支配権は、人民の福利に反し、抑圧であり、さらに神聖法をのぞいてはあらゆる法がまちがっており、無効なものであるにもかかわらず、まったく支配権については、名称があげられていない。しかしながら、彼等もまさにこの無効なものを、体制がより良くならぬ限りは、基本的なものとなし、敬意を払い破棄しないのである。

〔かの書物の主張についての概観〕

かの書物の筆者は次のように記している。「現在のわれわれの宗教は、イマームの隠れの時代における法哲学者（ファキーフ）は、イマームの代理人であるという。この言葉には、法律上も学問上もいくつかの不都合がある。この言葉がいう限りでは、統治権と行政権がある場合は、われわれはいたるところに、時には一つの家の中にも幾人かのシャーを持つことになる」と。この無理解の連中は話の内容をメチャメチャにしており、まちがったし方で、人々に多くのものを伝えている。われわれは、われわれがシャーである

とか、支配はわれわれの権利であるなどと、いかなる法哲学者（ファキフ）も今までに言っていないし、本に書いたこともないことを述べている。勿論、われわれが述べたように、支配体制と行政権が確立すれば、すべての賢者は、それは良いことであり、国と人民の福利に一致すると確信している。勿論、機構が神の定めと神の正義の基礎の上に立てられているのであれば、最善の機構である。しかし、現在のところ、そういうものを彼等から受けとっていないのだが、彼等法哲学者達も、この中途半端の機構に全々反対していないし、政府の基礎を破壊してしまうのを欲しなかった。また、かりに時たま権力者と対立しても、その権力者がいることが国家の利益に反するとみなしたために、その人物と法哲学者達に対立したのである。そして、もしそうでない場合には、専制体制の基本原則について今日までに、この階層の中から反対の声があがったことはないのである。むしろ、多くの高位のウラマーが、国家の形成のために専制君主達と協力したのである。たとえば、ハージェ・ナスィール・アッディーン、アッラーメ・ヒッリー、ムハッキク・サーニー、シャイフ・バハーイー、ムハッキク・ダーマード、マジュリスィー、などがそのようなウラマーである。王朝や専制君主達がこれ等の人々に対し、どれ程苛酷な仕うちをし、また彼等を迫害しても、国家的機構と行政の根本原則に対する反対の声は彼等の中からさらに出てくることはなかった。歴史的事実はすべてそろっている。ムジュタヒド達が王朝に対しておこなった支援は、歴史書の中に記されている。今、あなた方は、王朝とムジュタヒドとの間を悪いものと見ようとしている。このようなことは、悪意争乱志向、軋轢願望、不和の創出および国家の維持の基礎である統一の破棄以外のなにものでもない。むしろ、ムジュタヒドは、国家の繁栄と福利をなによりも望んでいる。ところで、「この言葉には、法律上も学問上も、いくつかの不都合がある」と言っているが、そのうちの一つでも論証し、裨益するところのあるものとしてもらいたいものである。もしも、こういうことを誰か別な識りもしないし、経歴もわからないような人が言ったのであれば、その人には多分、不都

合と思えたのであろうと考えるのであるが、われわれは、こういうことを言っているお前達が、イスラーム法について何も知らず、まして、法哲学者達がこういう問題をいかなる書物の中に書いているのかも知らないことも知っている。であるのに、どうして、これ程までに空いばりし、自分の品位を下げているのであろうか？

〔イマームの隠れの時代におけるファキーフの政府の論拠〕

以上のことから、「イスラーム法の根拠によれば行政権はファキーフにありとするのはまったく証拠のないことである」とするかの著者の情報源を理解すべきである。イスラーム法上の論拠の主なるものは、諸イマームのアフバールとハディースであり、それはまた預言者にさかのほり啓示にもとづくものである。今ここにいくつかのハディースを引用し彼等がイスラーム法についてまったく無知であることを明らかにしよう。

(一) シャイフ・サドゥークは権威ある伝承継譜とともに、みずから「宗教の完成の書」の中に、シャイフ・トゥースィーは「イマームの隠れについての書」の中に、タバルスィーは「立証の書」の中で隠れイマームの尊い伝言をつたえている。その伝言の中に「事件が発生したならば、それについてわれわれのハディースの伝承者に訊ねなさい、なぜならハディースの伝承者は、あなた方に対する私の証しであり、私は伝承者にとっての神の証しであるのだから」とある。したがって明らかなことは、イマームの隠れの時代における人々の義務は、彼らのあらゆることがらについてハディースの伝承者に訊ね、それに従わねばならず、イマームはハディースの伝承者を自らの証しとなし、自らの後継者と決めたということである。

(二) 「アフバールの意味」というシーア派の最も重要なイスラーム法の書物の中でシャイフ・サドゥークは、信徒の長アリーという言葉として次のように

伝えている。すなわち、「預言者は、神よ私の後継者を恵みたまえ、と言った。すると神は、預言者よ、お前の後継者となるものはわたしの後にきて、わたしのハディースとスンナを伝えるものである、と言った」と。したがって明らかなことは、預言者のスンナとハディースを伝えるものが預言者の後継者であり、また預言者にとっても立証されているということである。なぜならば、ある支配者がある人物を自らの後継者として紹介したならば、その意味は、支配者がいない時にその人物が支配者の仕事を実行しなければならないということであるからである。

(三) ウマル・ブン・ハンザラの伝えた言葉に次のようなものがある。「お前達のうちに、われわれのハディースを伝え、宗教法上許されたものと禁じられたものについて検証し、われわれの裁定を知っているものがある。人はその者の裁定に満足しなければならない。なぜなら、私は彼の者をあなたがたに対する裁定者として置いたのだから。それ故、もしも彼の者がわれわれの裁定にもとづいて裁き、しかも、その裁きをうけとらないのであれば、それは、神の裁きをないがしろにしていることになり、われわれに対する挑戦であり、われわれに対する挑戦者は神に対する挑戦者であり、それは多神崇拜と同じである。」この伝えでは、ムジュタヒドを裁定者(hākim)と定め、ムジュタヒドへの挑戦をイマームへの挑戦とし、イマームへの挑戦を神への挑戦とし、神への挑戦を多神崇拜としている。

(四) 殉教者の長イマーム・フサインの「理性の贈りもの」に伝えられるところに「それは、すなわちものごとのなり行きの基本路線と裁定は神の許したことと禁じたことをまもっているウラマーの手にあるからである」という言葉がある。この伝承から明らかなことは、すべての事がらの実行の権利は神の許したものと禁じたものをまもっているシャリーアのウラマーの手にあるということである。われわれは、ここでは引用をこれまでにとどめておく、もっと多くのことを知ろうと欲する人はそういう箇所をみってみるとよい。

〔欺瞞的宣伝と誤り〕

さらに、いつもの習慣でもう一つ欺瞞的宣伝をおこなって、次のように言っている。「ある人々が言うには、行政権がファキーフの手の中にある必要はない。むしろ、誰の手の中にあってもよいが、あるジャーたちがしたように、また憲法の中にもあるようにファキーフ達から許可をうける必要がある、ということであるが、その場合にも、問題がある。」すでに述べたようにファキーフが許可を与えることができるというのは正しい。さらに、条件を完備した一人のファキーフの許可というものは、それ自体で正統のものである。しかしながら、だれもがだれにでも許可を与えることは言っていない。ムジュタヒドにはこのような許認権はない。それどころか、預言者もイマームも神の側から誰にでも許可を与えるという許認権をうけておいていない。彼等は神の法というその基礎が叡知と正義に根ざしたものに違反することがない人、その人の国の正式の法が神聖な天界の法であってヨーロッパの法とかそれよりもさらに悪いものでないような者に許可を与えることができるのである。理性と憲法にかんがみて、あらゆる法がイスラーム法に反しているとするれば、この国には法的に正統性がないのである。これらの理由や他の理由から、われわれはこれまでのわが国は立憲国家と見なされないというのである、なぜなら国会も憲法に反しているし、選挙も諸法令もそうだからである。しかしながらこうした事情にもかかわらず、ムジュタヒド達はこの無秩序に反対することを許可してはいない、彼等はなによりもその時代における国家の保全監督の先頭に進んでいるのである。丁度、みんなが知っているとおり、イラクにおいてその独立のために立ちあがり、この中途の独立を獲得した者は故アーガー・ミールザー・ムハマド・タキー・シーラーズィーが指導したその時代のウラマーであった。現在でも、国家にとって困難な問題が生ずればムジュタヒド達は自らの究極的任務を知ってそれを取り除くであろうし、また様々の困難な事件において政府と協力するであろう。この時代

においてこの国にとっての害となっている誤ちの一つで最たるものは、宗教者の影響力の否定であり、これは国にとって最悪のことである。なぜなら民衆の心は抑圧と不正を通じて政府に苦しみ、政府は民衆の傷ついた心を持ってしては自らの国を防衛することができない。しかし、もしも宗教者の力があつたならば、人々は原始イスラームの時代のように実践をすることになつたであろう、また国家は宗教者の一致団結した力強い手と熱い心で自らを防衛したであろう。あるいは他の人々に賛同させたであろう。この宗教者の影響力を否定するという事は国家の誤ちの一つであつたし、現在もそうである。人々が目ざめるまでには、事は終つてしまつていたのである。国家のもう一つの誤ちは若い人々が、宗教者に悪意を持つようにすることであつた、政府は全力をあげてその努力をしその結果、精神の力と物質の力が互いに分離してしまつた。また致命的な損害を国に与えた精神と物質の力を失うことによつて国家の事業は遅れ、この二つの力を回復しないかぎり、現状に甘んじることになる。われわれは、この方針がレザー・ハーンのおそまつな脳から出たこととは信じがたい、なぜなら、これは他の人々が練り上げた計画にもとづく命令なしには実行されないような熟慮の末の基本計画だからである。そして、現在もその計画に従うことが国家の崩壊を助長しているのである。